

三浦浩氏の言葉から私たちは何を学ぶか

記念誌編集委員会

手許に「三浦浩を偲ぶ：一周忌法要」という小冊子があります。平成26年9月29日、享年68歳というのですから、八王子の囲碁界にとって誠に惜しまれる逸材です。「八王子に生まれ、八王子で育ち、八王子で住んでいた」と八碁連中興の祖で、初代「八王子の碁を楽しむ老人連合（碁老連）」会長である熊崎正一氏が八王子市民栄誉賞への推薦文で述懐されています。八碁連創立30年を迎えるこの稀世の棋士がいろいろな機会で語ってきた言葉を拾い直して、八王子の囲碁の発展にいかに寄与されたかを振り返ってみることにします。

三浦氏 「相手が石音大きく着手してたら、それにつられないと、そっと石を置くのも冷静な気合いだ」

確かに対局では、時折自信満々に石音をたてて打つ人がいます。「指がしなる」といってもよいかもしれません。しかし、その気迫に対して、冷静沈着に、まるで石を置いたことが周りにわからないような立ち居と仕草で対応するのも一つの美であると云っています。これもひるむことない対局姿勢と申せましょう。

三浦氏 「アマチュアでも一局で2時間半から3時間はかかります。その間、緊張感を保ちながら碁盤の前に座っているのは相当な体力が必要です。囲碁は碁盤の上の格闘技ですから、ひるんだら負けです。常に闘争心を持つことが大切なんです。」

社業、囲碁と多忙を極めるなか、高尾山、次に奥多摩と徐々に足を伸ばして山々に挑戦したようです。年間3、40回、日本百名山も八割方頂上を極めたといわれます。盤上の格闘技の体力はこうして養われたようです。趣味を広げることは、生き方に幅と深みを添えるようです。

三浦氏 「普通は名刺を百回だしてもなかなか覚えていただけないのに、囲碁のファンの方でしたら、一回で顔と名前を覚えていただけます。」

「ははー、あの人か、」と云われる人は幸いです。名前を覚えてもらうにはそれ相応の努力が必要だ、ということです。囲碁好きの人でしたら、営業話はほどほどにして、「一局、ご指導お願いできませんか」と三浦氏にいいたくなつたでしょう。



写真1 三浦浩氏

三浦氏 「おおむね、相手に良い手を打たれて敗ける事は極めて少ない。ほとんどの対局において、自分の悪手より負けとなる。私自身、自分の落手により敗戦となるに及んだ局数あまたあり、悪手は悪手を呼ぶというが、実際冷静にはなかなかないものだ。」

含蓄のある言葉です。「あの手筋は我ながら痛快だった」とか、「相手の定石外れをしっかりとがめることができた」と溜飲を下げがちになります。勝ったときは得てして自分の着手が良かったと思うのです。そうではないというのです。相手が悪手を打ったので幸運にも星を拾ったと思いなさい、驕ってはならない、と諭すのです。

三浦氏 「私の大先輩の村上文祥さんが常々言っていた事を思い出す。碁を強くなるには詰め碁を勉強するのが良い。特に難しい手数の長いのをやる必要はない。短い手数の基本的なものを繰り返し、正確に解けるようにするのが大切であると云われていた。」

日本アマチュア本因坊決定戦全国大会での最初の優勝は昭和46年の17回大会でした。この大会の特徴は選手の年齢が大幅に若くなつたことで、前回の16回大会では37.5歳、17回大会は30.8歳というそれまでにない若々しい大会だったといわれます。24歳という少壮気鋭の三浦氏が初出場で初優勝という栄冠を獲得します。そして、平成11年の第45回同アマ本因坊決定戦で5度目の優勝を飾ったとき、25歳の対戦相手をして「昔の自分を見るようでした、若さの勢いを感じました」と対局を振り返っています。

この大会後のコメントが振るっています。四強といわれた村上文祥、平田博則、菊池康郎さんらを破っての優勝です。

三浦氏 「まだまだですよ。横綱と前頭の関係、いや小結くらいにいったかな、やっとまわしに手がかかった程度です。特に村上さんには勝てる気が全くしません。」

アマ四強といわれた棋士に囲まれた三浦氏は幸いな方でした。同じような棋力のライバルを持つことは、上達のために良かったはずです。先輩から学び、勝負にあまりこだわらない姿勢が伝わる言葉です。勝者の驕りは些かも感じられません。アマ四強とかアマ五強という時代は、日本のアマチュア囲碁界の全盛期だったようです。

三浦氏 「しかし、意外に判断ミスが多かった。若い頃に比べて無駄な読みをしなくなりましたね。直感のほうがいい結果を生むことが多いから。」



写真2 くつろぐ三浦浩氏

直感とは、積み重ねた経験や石の形から生まれるひらめきです。無駄な読みとは雑念がまぎった時間の浪費のことです。こうして悪手が生まれるのです。まさに「下手の考え方で似たり」ということでしょう。

三浦氏 「碁を打つことが相手との対話なのだ、口で談じるのではなく、交互に石を置く”手談”で相手の人格が浮かび上がってくるし、こちらの性格も伝えることができる。」

三浦氏 「戦いが得意で本当にが飛び出てくるかわからない。ふわふわした着手では破壊される、胆力が大切」

中国人相手の対局の心構えを語る言葉です。「胆力とはなんですか?」と問いたくなりますが。いろいろな着手を日頃から考え、どんな手が飛び出ても臨機応変に迎えうつということでしょうか。

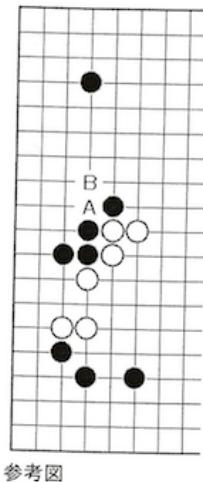
三浦氏 「手談ということですが、世界選手権ですと、いろんな国から選手がやってきて、対局するのですが、言葉が通じなくても、考えていることはわかります。」

中野市民センターでの囲碁教室の講師をつとめていたときの解説で、次のような参考図を使い、つぎ方を取り上げています。

三浦氏 「Aとがっちりつないでおくこと、Bと形になすんではいけない」

一見平凡ながら、着実に地に足がついた着手、利きを生まない手を推奨するのです。がっちりつがないで、かけつぐことが多いのを反省します。

三浦氏 「よく趣味は囲碁という人がいますが、確かにたくさん的人が囲碁を楽しんでいます。だけれども、勝負だけを争うならば、こんなに盛んにはなっていないと思います。勝負以外の有益さがあるから、こんなに盛んなのではないでどうか。」



参考図

囲碁人口は高齢化しています。「勝った、負けた」という個人的な勝敗を競う囲碁となつては伝統文化の要素はやがて衰退することが危惧されます。伝統は次の世代に継承していくなければなりません。

三浦氏 「人生というのは人と人との交流ですから、コミュニケーションづくりにはうってつけです。しかも簡単な道具でどこでも、状況を問わずに楽しめます。」

三浦氏 「手をゆるめることはほとんどない、いかに内容を良くするかを考えて打っていく」

普段、三浦氏は、置き碁の指導碁が多かったようです。そのときの心境を語る恬淡とした言葉です。石の方向を考え石を動かせ、最善の手を打つということに神経を注いでいたことを伺わせます。そうすれば、じりじりと接近し置き石のハンディを取り返すことを知っておられたのでしょう。

三浦氏 「将棋と違って一つひとつの石は全部同じ力しかありません。すべて平等です。将棋のように駒によって力と動き方が違うということはありません。」

「石には能力の差はないわけですから、100%その人の能力が表れます。もっというならば、囲碁は人生そのものを表すようなところがあります。」

囲碁は博大で奥深く人生そのものであると、理をつくし情をつくした文章です。人間に残した文化であり、そこから学ぶことは人生を豊かにするということでありましょう。

北岸山喜福寺住職の村岡研一氏は三浦氏の一周年忌法要の諷誦文(ふじゅもん)の中で次のように讃えています。

「その生涯彩る歴史に欠かすことできぬ、故人のアマチュア囲碁界へ残した卓越せる戦跡、その最盛期、旭日昇天の勢いに一世を風靡す。ここに故人の遺徳を偲び敬って白す。」

三浦浩氏の主な棋歴-----

アマ本因坊戦	昭和46年	優勝
同	昭和49年	優勝
同	昭和54年	優勝
同	昭和55年	優勝
同	平成11年	優勝
アマ十傑戦	昭和50年	優勝
同	昭和51年	優勝
同	平成4年	優勝
アマ選手権戦	平成元年	優勝
アマ世界選手権戦	昭和58年	準優勝
同	平成2年	第三位

参考資料-----

碁老連ニュース第33号 平成4年
碁老連ニュース第165号 平成17年
囲碁梁山泊 2014年白秋号
囲碁 1974年12月
建設通信新聞 1992年9月
建設通信新聞 1999年9月
囲碁クラブ 1970年6月
毎日新聞 1971年9月
毎日新聞 1988年6月
毎日新聞 1999年8月

謝 辞

この原稿は、中野囲碁同好会の望月毅士氏のご協力で作成することができました。望月氏は2012年2月の中野市民センターでの三浦囲碁教室に協力した縁で、その後三浦教室を提案されます。それ以来、三浦先生宅で2012年5月12日からお亡くなりになる当日まで、毎月第1、3金曜日の午前に教室を開催し、その数60回に及んだそうです。

八碁連の囲碁の好きな気鋭な方々が集まり、毎回、お土産にビール6本と人数分の昼食を持参し、指導していただいたそうです。ビールでご機嫌な三浦先生の自慢話を交えながらの一時となつたようです。

追 記

恩方囲碁同好会の竹内朝晴氏からも、三浦八段についての思い出が寄せられました。

「私も、当時八碁連会長だった望月毅士氏にお誘いいただき、三浦八段から直接ご指導を賜りました。私は金曜日でした。当日はたまたま望月会長が健康診断で先に帰られました。残ったのは望月会長の友人と私の二人でした。いつもの通りご機嫌で、私は面白くグラグラ笑ってばかりでした。帰宅時間がきたので二人で、これで失礼しますと申し上げた時の事でした。」

「お帰りになるなら申し訳ないが私の歌を一曲お聞き願いたい。如何ですか？」分かりましたと申し上げて歌い始まったのが「都の西北早稲田の杜に～」。早稲田大学の校歌でした。物凄く大きな声でした、その次の週かその次かお亡くなりなつたとの報を受けました。誠に残念でした。もっともっと八碁連の方々にご指導いただきたかったという想いでした。」

浅川囲碁同好会の南正一郎氏からも思い出が寄せられています。

「三浦浩先生については、私も望月毅士氏のお薦めで、一時期、三浦先生のお宅に通っていました。今、その頃の手帳をめくってみると、お亡くなりになる 10 日前の平成 26 年 9 月 19 日の金曜日に、例により缶ビールを持参して訪れ、教えを乞うた直後であったので、大変驚いたことが記憶に鮮やかに残っています。」

注 釈

「諷誦文」とは、「亡者追善のために施物を供え僧に誦経を請う文」（広辞苑）